

## 土佐清水の歴史

### 重要な港

考古学上の発見物によれば、現在の高知県、かつて土佐と呼ばれた地域には先史時代に人が住み、人々は常に海に頼って暮らしていました。現在の土佐清水の沿岸の村々は昔から陸路では到達しにくく、そのため殊に海に依存してきました。15世紀頃から足摺岬の両側の海岸は、京都（当時の首都）や商業の中心地、大阪と、中国の明朝や東南アジアを繋ぐ大洋航路の重要な港に発展しました。商船の乗組員は土佐清水の深い入り江に船を着け、暴風雨からのがれて、体を休め必要物資を積み込みました。町の元々の名前、清水（「澄んだ水」）は、渴ききった船員たちを引き付けた地元の泉を指しています。

### 繁栄する漁業

古くからの日本の地理学では、土佐は「はるか南」、未知の海域への孤立した出入口と言われていました。しかし、航法や輸送手法の向上により、次第にこの地域に出入りできるようになりました。江戸時代（1603年～1868年）初期に、裕福で装備の良い紀州（現在の和歌山県）の漁師たちは、土佐の大名にお金を払って、足摺岬の沖でカツオ（カツオ）漁業を始める権利を得ました。彼らは地元民に外洋の魚の獲りかた、鰹節のつくり方を教えました。いぶしたものの、乾燥させたもの、時には発酵させたものなど、長年日本の料理で欠かせない食材と考えられてきた鰹節のつくり方を教えました。

### ビジネス・ブーム

1700年代に、現在の土佐清水の一部の人々が海上貿易に参入し始めました。ビジネスに精通したこれらの事業主たちは、薪や魚介食物、炭、その他の地元の産物を主に扱い、何年もの間に相当な財産を蓄積しました。豪勢な家や倉を建て、住居には中国の陶磁器やその他異国の贅沢品を飾りました。彼らは鰹節の事業にも手を広げ、彼らの助けで清水の鰹節は日本全国で最高だという評判を得るようになりました。

### 海から陸へ

土佐清水には平坦で耕作可能な土地がないため、地元の人々は海に頼って暮らさざるをえませんでした。しかし、大地が完全に見過ごされていたわけではなく、現代的な道路が陸路の移動を可能にするずっと前から、野心的な土地利用プロジェクトがここで着手されていました。江戸時代（1603年～1868年）以降、この地域の統治者は、清水の中心地近くの入り江を製塩に利用していました。また、山腹を石で補強し、土地を段々畑に変え、主にサツマイモの栽培に利用しました。1960年代後半までこれらの畑は使用されていましたが、現在はほとんどが元の状態に戻ってしまっています。